

国際ミツバチ研究協会



雑誌紹介

Bee World 78 巻 4 号 (1997) Delaplane の「応用科学—養蜂家のためになる研究 3. ミツバチヘギイタダニ」はダニの防除法の数々（アピスタンから化学物質を使わないやり方まで）とダニの寄生率を調べる方法（高精度な方法から簡易法まで）を述べている。Allsopp et al. の「ミツバチ健康白書、南アフリカのミツバチヘギイタダニ」は、かつてはヨーロッパ腐蛆病だけが養蜂家に知られた病気であった南アフリカに、1995年にはアカリンダニが、97年にはアメリカ腐蛆病が、そしてついにミツバチヘギイタダニが見つかったと報告している。Wells et al. はメキシコにおけるミツバチのアフリカ化の第2のモデルと題して、最悪のシナリオ（すべてのハチがアフリカ蜂化ミツバチになってしまう）ではない可能性を示している。特にユカタン半島においては侵入直後はアフリカ化が進んでいたが急激にその速度が鈍っているという。Thapa and Wongsiri はタイの *Eupatorium odoratum* という養蜂植物を紹介している。本邦のヒヨドリバナに近いこの花は、タイでは11-1月に、マレーシアでは3-5月に、ネパールでは11-12月に開花し、糖度45%という濃厚な花蜜を分泌する。

Bee World 79 巻 1 号 (1998) van Veen et al. は「コスタリカのミツバチヘギイタダニ」と題して、同地でのダニの発生状況、分布の拡大、および現状ではダニ剤が認可されていないので農業省が勧めているギ酸による防除について述べている。Crane は「壁巣箱と壁養蜂」と題して、世界各地の壁に設けた巣箱とそれによる養蜂について、北アフリカ、スペイン、フランス、イタリアや、地中海の島々、トルコやイラクで

のセイヨウミツバチによるもの、パキスタン、インド、ネパール、ベトナムでのトウヨウミツバチによるものを写真付きで紹介している。Wongsiri et al. はタイの養蜂植物としてタイでは輸出ハチミツの主力でもあるリュウガンを紹介している。本文中の数字だけを拾うと、リュウガンは1haあたり2tの果実生産で、同時に約200kgのハチミツ生産となる。IBRA ニュースとして、次期IBRA会長にアメリカ農務省ベルツビルミツバチ研究所のShimanuki博士が選出されたことが報じられている。

Bee World 79 巻 2 号 (1998) Molan は「蜜源植物の同定法の限界」と題した論文で花粉、微量成分組成、アミノ酸組成などによる同定法には限界があり、満足のいくものではないと述べている。特に花粉分析では実際の主蜜源を見誤りやすく、化学的な方法は、極めて多種多様なハチミツの成分組成を網羅しきれず、結局は信頼に足る方法とはいえないので、現状では官能検査を含めて数種の方法を組み合わせ用いるのが望ましいとしている。Hatjina は巣門に取り付ける花粉分配器やもっと単純に巣門を狭くして出入りする働き蜂の間で花粉のやりとりが起こるようなフェルトやナイロンブラシを取り付けることによる他家受粉を必要とする作物の生産性向上効果について述べている。ここでは装置の紹介と、実際に出巣する働き蜂の体表上の花粉の増加を調べた結果が述べられている。この号の表紙にはJohns事務局長がドイツを訪れた際にホッヘンハイム大学のスケップ網み教室でスケップを編んでいるスナップが使われている（The Buzz欄に紹介記事）。また第4回アジア養蜂研究協会大会の報告も掲載されている。

Journal of Apicultural Research 36 巻 3/4 号 (1997) 論文9報と短報がひとつ掲載。Delaplane and Hood はバロア病のアピスタンによる治療時期による効果の差を報告している。6, 8, 10月および無施用の各区の12月の

国際ミツバチ研究協会

蜂群の状況から8月が最適施用時期であったとしている。Grant et al. は「ミツバチに寄生しているアカリダニに共生する微生物」の中で、ミツバチからは得られなかった細菌や真菌などの微生物がアカリダニ中からは数多く見つかったと報告している。この状況でもミツバチの気管内が清潔に保たれるのは何らかの対微生物機構をミツバチが有するからだと考察している。Anderson et al. は「チョーク病の原因となるハチノスカビの検査と加温防除」と題して、このカビに特異的な培地を用いて、ハチミツ中の生きていた胞子と菌糸体を検出する方法を述べている。またハチミツを65℃で8時間、あるいは70℃で2時間湯煎することで胞子を死滅させられることがわかった。Al-Rifai and Akeel はジョルダンの輸入および国産ハチミツ中の農薬残留検査を行って、26検体から50種の農薬の残留を検出している。残留していた農薬では、有機塩素系が最も高濃度で、次いで有機リン系、ピレスロイド系などが検出されている。リンデン、DDT、ディエルドリン、アルドリリンも見つかっている。フルバリネートは4検体でのみ見つかり、他のダニ剤は検出されなかった。なお今号には36巻の索引が掲載されている。

Journal of Apicultural Research 37巻1号(1998) 7報の論文と2報の短報が掲載。Stort and Rebutini は4タイプのセイヨウミツバチ(イタリアン、コーカシアン、アフリカン、およびアフリカ蜂化ミツバチ)の防衛行動の比較と触角上の数種の感覚器の数のちがいを検討し、いくつかの感覚器についてミツバチのタイプごとの差はあったが、防衛行動の強さとの相関は明確でなかったとしている。Hadisoelilo and Otis は新種クロオビミツバチとトウヨウミツバチの雄蜂の巣房の蓋が異なることを示している。トウヨウミツバチでは蜂ろうの蓋の下に繭の固い蓋がありこの中心には穴があい

ているが、クロオビミツバチでは、脆弱な蜂ろうの蓋が日齢に関係なくあるのみで硬化して穴のあるような蓋はなかったとしている。トウヨウミツバチではこの蓋が雄蜂の出房後巣門の外に捨てられるのが特徴だが、クロオビミツバチではそのようなことは見られない。Buttermore et al. はタスマニアに定着したセイヨウオオマルハナバチを現地でも飼育して温室で利用するために遺伝的な調査をしている。営巣させたマルハナバチで倍数体の雄の出現率を近親交配の指標として調査したところ、当地のマルハナバチは完全に近交系であり、おそらくたった1匹の交尾済女王蜂から現在の個体群が得られたと推論された。したがって、セイヨウオオマルハナバチを飼育・育種する場合には外部から新たに導入する必要があるとしている。Frankel et al. はハチミツの抗酸化性について報告している。14種類のハチミツの抗酸化性は最大のもの(ソバ)と最低のもの(セージ)で20倍以上の差があり、蜜源に依存する成分組成はかなり異なっていた。抗酸化性は水分含量とハチミツの着色とに相関があり、抗酸化性に期待する健康食品としてのハチミツは蜜源の種類によって選ぶべきであるとしている。

Apicultural Abstracts 48巻4号(1997) 文献番号1105~1483までの379編が収録。日本からのものはうち18編。同巻5号は索引。**Apicultural Abstracts 49巻1号, 2号(1998)** には、文献番号1~358までの358編(うち日本からのもの12編)と文献番号359~722までの364編(うち日本からのもの14編)が収録されている。(中村 純)

おわび
国際ミツバチ研究協会の今年度の会費の請求が一部遅れています。雑誌の不着・遅配で大変ご迷惑をおかけいたしました。また新加入をご希望の方はミツバチ科学研究施設までご一報下さい。